パースペクティヴとしての スポーツ・コミュニケーション

橋 本 純 一

序．緒言

1995年4月，信州大学は従来の人文学科一学科制から，人間情報学科，文化コミュニケーション学科の二学科制に改組した。

この改組により新たにスポーツ・コミュニケーションを含む，非言語コミュニケーション講座が誕生した。

そこで本稿ではスポーツのコミュニケーションが，自我，身体知，権力，セクシュアリティの次元でいかに重要な役割を担うのかを提示し，また，それらの次元で，スポーツ・コミュニケーションから現実世界に分け入る意義や原理的研究の重要性，さらに，これらの重層的な関係を前提としたアプローチの重要性と可能性が述べられる。

世界，国家，地域，或いは民族，ジェンダー，階級の多様な水準で，政治的，文化的，経済的，言語的な境界を超えた共通の準拠枠や意味をスポーツが様々なかたちで提供している今日，いわば「世界」(「現実」) としてのパースペクティヴ，つまりそれ（スポーツあるいはスポーツ・コミュニケーション）を通して「世界」が現れてくるようなパースペクティヴを用意しておくことのメリットは疑い得ない。

1．自我の次元

今日，近代的自我の基盤ともいうべき近代個人主義に変化が見られる。山崎正和によると，個人主義には堅い個人主義と柔らかい個人主義の2つがある（山崎，1984)。

堅い個人主義は，従来の自我のイメージであり，それは信条を貫いて変わらない精神的自我であり，感情に動かされることなく，理性的でありつづけようとする自我である。そしてそれ自体不可分な統一体であり，他者とは一線を画し，対立するものと考えられている。

堅い個人主義は，産業社会という生産中心の自我のあり方であり，「自己を生産の目的として，また手段として考える自我」である。したがって，それは，我慢，倹約，無駄のない生活の仕方を行い，しかも，他の人間を目的達成の手段とみなしている。このような個人主義は近代産業社会の歴史的産物であり，それは他者に対して傲慢で，独善的な自我である。

これに対して，柔らかい個人主義は，現代消費社会における自我のあり方を表す。それは目的実現のために自己を限定しない自我であり，また，同時に，他の人の目を気にする自我である。それは他者の評価の中に自己の実現をめざし，他者を内に含んだ自我である。

彼がいうように，現代人の自我は親しい他者との関わりにおいて社会的に形成されている

ように思われる。また，アダム・スミスが『道徳感情論』で表したように，近代人の自我も決して他者を無視しているのではなく，他者の目を気にしている（スミス，1973)。人間の自我は常に，また本質的に社会的なものといってよい。

G.H.ミードは，デカルトのような自我の孤立説を否定し，社会は自我に常に先行して存在し，自我は社会から生まれ，そこにおける社会的経験と社会的活動の過程とにおいて生み出されてくると主張した（ミード，1973，1991)。ミードによると，自我はそれ自体として自然発生したものではなく，他者の態度，期待，パースペクティヴとの関連において生み出されてくるものである。人間の自我は他者の期待を取り入れる「役割取得（role-taking)」を通じて具体的に形づくられる。このような複数の期待をまとめあげ，組織化・一般化したものが「一般化された他者（genaralized other)」の期待である。

「一般化された他者」は，ゲームにおいて形づくられる。そして，プレイを含んだゲーム（いうまでもなくスポーツは身体活動を伴うゲームである）は子どものみならず大人の自我の形成に関しても重要な役割をはたす。

典型的には，小さな子どもにおいては「ごっこ遊び」などを通じて，また青少年・大人においては家族，職場，コミュニティ，国家，国際社会等の「一般化された他者」の期待との関連において自我が形づくられることになる。

スポーツ・コミュニケーションというテーマに引きつければ，具体的には，組織的なスポーツプログラムに関わっている子ども（サッカー少年団員，リトル・リーガーたち）とそうでない子ども（インフォーマルな仲間集団で遊んでいる子ども）との自我形成プロセスにおける比較研究が重要な主題になってくる。また，学校，職場，コミュニティ等におけるスポーツが，R.H.ターナー（Turner, 1962）のいう「役割形成（role-making)」や船津衛（船津，1983）の提唱する「創発的内省性（emergent reflexivity」にどのように影響を与えているのかが問われなければならないだろう。それはゴフマン（Goffman, 1961）の「役割距離（role-distance」行動の理論を乗り越え，既存の役割規定の枠を越えた，より積極的な新たな人間行為が展開する可能性を探ることである。

さらに，スポーツが「近代的自我」という幻想／神話と現代的自我との関係にどのようにコミットしてきたのかを理解することも重要である*1。近代から高度情報／消費社会においての自我の変容を，スポーツの発展との相関において把握すること。それがテクノロジーと社会形態の新しい展開とどう関連しているのか，それがわれわれをどのような解体あるいは解放，苦悩や歓喜，空虚や充溢の経験に導くのか，このようなことが問われよう。

2．身体知の次元

スポーツというと，一般にはおよそ学問や知とは無関係のもの，本質的に相容れないものと思われてきた。そして今でも，そのように考えている人が少なくないだろう。すなわち，スポーツとは，多かれ少なかれ隔離された時空間でのプレイ（遊び）でありゲームである。

我々はそれを享受し楽しみさえすればよく，そこには理屈はいらない。他方，知や学問は根本的に真面目なものであり，我々は感情や好みをできる限り排して，ひたすら禁欲的に真理を究めなくてはならない，と。

そこには遊びと真面目（あるいは仕事）という二分法が想定されている。西欧の近代哲学と近代科学によって代表される「近代知」とは，まさにこのような性格を持って発展したといってよい。

ところで，このような近代の知あるいは近代の学問を基礎づけたのは，デカルト主義の心身二元論であった。すなわち，デカルトは，自己意識の立場から出発して，思い考えることを本質とする「精神」と，空間的拡がりを保つことを本質とする「物体」（「身体」）を，二つの実体として峻別した。そして一方で認識する主体と認識される対象，つまり見るものと見られるものとを引き離して対立させ，自我の存立の基盤を失わせるとともに，他方では世界の人工化と環境の破壊をもたらすこととなった。

そこで求められるべきは科学的な「近代知」によって排除されてきた感性的なもの，生きられる身体的なもの，つまり「身体の知」である。いまここで身体的な，あるいは間身体的なコミュニケーション（ひいてはスポーツ・コミュニケーション）を問題にすることは，伝統的な哲学的合理主義が排除してきたものをいっそう立ち入って考えることにもなるだろう。

中村雄二郎は「哲学の知」の反省の上に立って「演劇の知」を定立した（中村，1983）が，スポーツを含む「身体知」のシンボリズム，コスモロジー，パフォーマンスも「演劇的知」によるそれ同様，世界把握の基礎をなすものである。「身体的知」はなによりも，「近代の知」が見失ったものや排除したものを見直し，それらの豊かさを正当に回復することを目指すものである。普遍性と精密さを備えた「近代の知」は，人間の知や学問が，ある方向に純粋に自己目的化して発達していったものであり，そこからは人間的生のプレイ（遊戯）的なもの，偶然（ゲーム）的なもの，感性的なものが排除された。しかし，その排除の結果，知や学問は人間的生との結びつきを失うだけでなく，いわば貧血化して自己革新力と創造性を失い，重層的な現実に十分対応できず，生きた現実との間にギャップを深めることとなった。

ここで排除されたものの豊かさを回復することは，確かに必要であろう。しかしその回復は，ただ安易に非合理的なものの意味をみとめるというかたちをとってはならず，はっきり新しい知を目指して方法的に行われなければならない。

わたしたち人間は，誰でもみな身体をもったパトス的（受苦的・受動的）存在である以上，否応なしに外界からの働きかけに身をさらさなければならないし，情念に囚われ痛みや苦しみを被ることも避けがたい。けれども，このことは必ずしも不都合であるとばかりは限らない。というのはわたしたち人間は，身体をもった受動的・受苦的存在であることによって，世界や自然とのいきいきとした交流を持ちうるからである。

「パトスの知」は，科学の知が事物を対象化し操作する方向で成立した冷ややかなまなざしの視覚の知であるのに対して，身体的，体性感覚的な知であるといえよう。ここで体性感覚というのは，触覚，内触覚といわれるコスミックな感覚，筋肉感覚，運動感覚を含む全身の基礎的な感覚のことである。

ベルクソンは，「運動図式」の考え方を持ち出して，同様な重要性を訴えた（ベルグソン，1965）。しかし，そこではまだ，人間の身体の持つ受動的かつ能動的という両義的なあり方がそれほど突っ込んで捉えられていない。メルロ＝ポンティによって「運動図式」の代わりに「身体図式」ということがもちだされたのは，運動感覚を単に運動感覚としてではなく，深層の内部知覚として捉え直すためであった（メルロ＝ポンティ，1967）。

もっともメルロ＝ポンティにあっても，体性感覚の深部にあると思われる内臓感覚については，未だこれを取り込んではいない。湯浅泰雄は，内臓感覚こそ，本来の無意識，深層意識に関わるものであり，「身体図式」を気分的に色づけるものであるという（湯浅，1977）*2。

このように心身二元論によって精神と区別されることのない「共通感覚」（中村，1979）的身体とは，生きられる身体のことであり，活動する身体のことである。これらは言うまでもなく，市川浩の「身」の概念（市川，1975，1984），大沢真幸の超越的身体の概念（大沢，1990，1992）ともかなりの部分でオーバーラップする。

われわれは以上ようなコンテクストにおいてスポーツ的身体（間接的にも直接的にもスポーツにかかわる身体）を意味づけ，研究対象に分け入ることが早急に必要なのではないだろうか。

さて，身体にまつわるもっとも重要な研究は，フーコーやブルデューによって提示された権力の分析であろう。3，においてはこの上なく手強い，スポーツと権力との関係性についての議論に移る。

3．権力の次元

大多数の人にとって，また大多数の社会科学者にとってすら，スポーツと権力との関係を否定するのが常識であろう。体系的な研究はもちろんのこと，ほとんどめったに，真面目な課題として取り上げられることもない。というのも，常識は，スポーツの性格は十分に明白であるという判定を下すからである。しかしこの問題を考察することは，まさに，スポーツを介したコミュニケーションが諸個人，あるいは社会にとっていかなる意味を提供しているのかを摘出することに等しい。

近年連続して起こったオリンピックのボイコットや，主要なスポーツ大会への参加禁止措置などをみれば誰もが，政府や圧力団体はスポーツに干渉し，時にスポーツはこのようにして政治に引き込まれるものだ，ということを知る。しかし，このような場合にも常識は，「スポーツは本当は政治とは何の関係もない」，そのような結びつきは全くの偶然で，きわめて不自然かつ忌避すべきことである，と言明する挙にでる。

われわれは，まさしくこのようなスポーツと（広義での）政治とを無関係とする見方こそが，たとえ無意識であるにせよ，スポーツ／権力関係を再生産する点で重要な役割を果たしている，と主張する。常識の方が間違っているのである。不幸にも，社会科学もこの関係性を解明する点で，ほとんど貢献していない。

たとえばスポーツ社会学で優勢な見解は，スポーツが諸個人の人格形成，社会秩序の安定に積極的な役割を果たしている，というものである。

また，批判的な批評家たちがスポーツ／権力関係に注目した場合，それは通常，現代スポーツを批判する一部のエリート的な論客という立場でなされてきた。この立場は，現代スポーツの人気や熱狂を，病理的妄信，文化的退廃，大衆の堕落の徴候として退ける。「パンとサーカス」という社会統制のモデルは，いともたやすくこうした批評家たちの口から湧いて出てくる。そのほかの場合も基本的にはこの「文化批判」(Kulturkritik) に類似するものといってよい。このスポーツ観において，スポーツは，資本の要求する労働力を再生産するため，また資本主義社会の支配的イデオロギーによって大衆を教化するために，不可避的に，機能するものとしてみなされる。

われわれは，スポーツのもつ調和的側面と，その統制的・搾取的側面の両者を同時に考慮する立場に立つ必要がある。スポーツがどちらかの議論のコンテクストに位置づけられると，スポーツは一面的で，本質的に誤った方法で記述されることになる。

われわれの属している社会において，権力は社会という肉体に拡がり，その肉体をくまなく循環している。権力がかくも効果的に近代に拡がり，日常的に，的確に社会秩序に適用され，また時に再編され，一新され，入念化され得たのは，まさしくこの毛細管状の性質をもつからである。

フーコーの仕事は，われわれが，権力 (power) を，ひとつの実体として，すなわち，個人や集団のエージェントが他者を支配することを可能にするような所有物として扱うことを拒否する。権力は，ある単一のエージェント（資本家階級，政治エリート，男性など）が独占的に保持するものとして考えるのは好ましくない。また，権力は社会構成体（経済，家父長制，その他なんであれ）における単一の位置や次元に備わっていたり，そこから生まれてくるものでもない。権力はフォーマルに構成される政治的要素に還元して捉えるのではなく，このような領域を超えて，「市民社会」の隙間にまで拡張してくる権力ネットワークとして捉えられるべきものなのである。

権力は社会に遍在する資産であり，それは所有されるものというよりも関係の連鎖という方がよいものである。そしてフーコーは権力関係の分析を具体的に展開するには5つの点が明確にされる必要があるといっている。簡潔にまとめると以下のようになるであろう（フーコー，1982．Rojek，1985)。

(1) 権力は差異化の現象として検討されなければならない。……その例として，法・地位・特権による差異，富・物財の経済的差異，言語的・文化的差異，知識・能力の差異。権力関係はこれらの差異化を操作する。
(2) 権力はその対象に関連させて追求されなければならない。……個人を活気づける明示的・黙示的目標は権力配備の支配下にある。
(3) 権力はその具体化に関連させて検討されなければならない。……権威や服従を呼び起こすような権力関係における多様な（イデオロギー的・テクノロジー的・経済的・政治的「記号」）の検討
(4) 権力はその制度化の程度に関連させて検討されなければならない。……例えば，権力の「記号」を支えているところの，権力における伝統的・法的・軍事的・経

済的・政治的メカニズム

(5) 権力は合理化に関連させて検討されなければならない。……所与の状況において諸個人の合理的計算に基づくコストと利益によって権力の行使にどの程度違いが見られるのかということ等

このような権力ネットワークの分析は，スポーツにおいて有効性を持ち得るのか。ある文化構成体がどの程度権力ネットワークに貢献するのかは，それ自体を他の文化構成体から区別させる自律的特徴によって決まる。この意味においてスポーツ領域はスポーツ／権力関係がどのように構築されるのかを分析するのに十分たる明白な特徴が認められる。

第一に，スポーツはそれ以上に還元できないプレイの要素を内包する。プレイは外的目標や報酬を持たない活動であり，それ自体で普遍的魅力を持つ活動である。

第二に，スポーツのプレイは高度に形式化される傾向があるということである。多くの場合，それはきわめて綿密な規約や規則によって支配されている。しばしばそれは，スポーツ以外の現実を一時停止し，隔離された時空間で「プレイを演じる」ことになる。この意味においてこの活動は日常生活とは区別された「演技」となり易い。プレーヤーも観戦者も時に祝祭の精神，つまり「現世を翻す」ことによって，現状を維持するという精神において参加しているのである。

第三に，スポーツは競技（contest）の要素を含む。スポーツにおける競争は参加者の条件を平等にすることによって結果の不確実性を伴い，これが，他のプレイを含む活動に比べて，固有な緊張と興奮をもたらす。

四番目以降の３つの特徴はスポーツ／権力関係を考える上で特に重要なものである。スポーツの演劇的性格は，成功と失敗，良き行いと悪しき行い，野心と成功，規律，努力などを語り流布する公的機会なのである。

第五に，スポーツはしばしば儀礼的実践の特徴を持つ。開会式，閉会式，優勝式典，審判や競技者の衣装，パレードなどをみればスポーツは驚くほど象徴化に富んでいて社会関係を人目につくように際だたせて示す力を持っている（国家元首の列席，国歌斉唱，国旗掲揚，軍隊的バンドの行進など）。学校スポーツや地域のスポーツも社会秩序優先観を象徴化し，記号化し，またそれによって権力関係を正当化するよう機能している。

このことは，われわれがスポーツのもっとも中核的な性質を考える時，より明白になる。スポーツ全般において主な関心は身体とその属性である。つまり，身体の力，技能，持久力，スピード，優雅さ，スタイル，体型や容貌等が試されたり披露されたりするのである。前述したように，近代知の精神を第一とする考えは，身体を社会科学的ディスクールからほとんど排除してしまった[*3]。しかし，身体の容貌，扱い，機能に対する統制は，あらゆる社会において社会秩序の重要な側面である。身体の容貌と利用がスポーツ行為にとって不可欠である限り，儀礼的実践としてのスポーツが社会秩序を象徴化し，維持し，権力ネットワークを保持するよう機能する（Hargreaves, J. E., 1986）。

われわれは身体が権力関係を象徴するということだけでなく，権力が文字通り身体に組み込まれ，付与されるということに注目しなければならない。それは筋力トレーニング，ラジオ体操，運動会，エアロビクス運動などに最も典型的に見いだせるように，社会的身体は多

様に再生産される。

近年では消費文化（Consumer culture）の影響下で，抑圧に代わって，刺激による統制を受け，新しい「規格化された（Normalized)」個人が生産されている事実などがまず検討されるべきであろう。

スポーツをコンフリクト，統制，抵抗として，すなわち，権力関係の作用するアリーナとしてテーマ化することは，究極的に人間的自由の達成との関連でスポーツをテーマ化することであり，暗黙裡に，スポーツ・コミュニケーションの潜在的な変換能力を問題提起することである。

4．セクシュアリティの次元

権力関係においても重要なセクシュアリティの問題は，多様な生を営む上で根源的なものであり，スポーツのコミュニケーションにおいても考えなければならない問題が多い。

セクシュアリティの定義についての議論も多い（特に性，ジェンダーとの比較において）が，ここではその問題の解決が目的ではないので，とりあえず，全米性情報・性教育評議会の「セックス（性）は両脚のあいだに，セクシュアリティは両耳のあいだにある」（すなわち前者は性器であり，後者は大脳をさしている）という見解（石川ほか，1984，小倉，1988）を採用することを宣言するに留めよう。つまりセクシュアリティとは生理現象であるよりも心理・社会・文化的現象ということである。

まず，スポーツと性的抑圧との関係について，そのメカニズムが解明される必要があろう。フロイト学派の社会心理学的解釈によれば，権威主義的な社会秩序を固定化させるものは，性的な関心とエネルギーである。性の抑圧は，エネルギーとしてのリビドーから力を奪うどころか，かえってリビドーを鬱積させノイローゼを引き起こす。このことが社会的に重大な帰結，権威主義的な心理構造を生じさせているという。

彼らによれば，スポーツの理論家たちは支配的な秩序の代弁者として，性的欲望を敵視する態度をとっているという。スポーツ哲学者C．ディームは，

「スポーツ的なものに対する強烈な関心は，性の成熟を迎えた未成年を一定の段階にとどまらせるための自然のトリックである。このあいだに彼らは体力を維持増進し，先走る性向を抑え，完全な成熟に備えて鍛錬する」（ベーメ，1980）つまり，自然が，性的欲望に対して，スポーツという避妊薬を作り出すのである。ヨーロッパで人々の生活に大きな影響力をもつ教会関係者の代表的な考えは，

「スポーツ活動は，自分をもてあそぶ特異な行動を人間から奪い取る。スポーツはまさに，絶えざる克己と自己規律を要する禁欲である。……スポーツがもたらす健康な疲労は，自慰と早熟な疲労を防止する有効な抑制剤といえよう。〈軟弱な肉欲〉を取り除くのがスポーツの役目である[*4]」

W．ライヒは，このような考えに対して

「長い間スポーツを続けても性的興奮を完全に静めることはできないので結局彼らは抑圧という手段をとらざるをえない。そして，権力者に盲従し，目下のものを迫害する権威主義

的人間，サド・マゾ等の性的倒錯人間，ヒステリー，ノイローゼなどを生み出す」(Reich, 1933)
と社会に対しての重要な役割を説いている。

また，スポーツ実技はレベルに無数の段階がある。そこで，巧い人が，あるいはその種目に詳しい人が，他の人に指導をする場面が至る所で見られる。実際にどのようなコミュニケーションがそこで行われているのかを「セクシュアリティの搾取装置としてのスポーツ」という視点から検討してゆくことも必要である（橋本，1988)。

さらに，いうまでもなく，フェミニズムの視点に代表される，ジェンダー・性的差別の問題をスポーツ参加，スポーツ報道を分析することによって様々な角度からアプローチしてゆくことが必要となろう（Hargreaves, J. H., 1994)*5。

5．結　　語

「現代」という局面は「近代」という世界システムの様々な前提が，流動し，解体し始めている局面であると感覚され，語られている。

「近代」においてイギリスで発生した「近代スポーツ」もこのようなコンテクストにある。スポーツする身体，何らかのかたちでスポーツにコミットする身体はいったい何を意味しているのだろうか。

わたしたちの自我は間―主体的な，あるいは間―身体的な想像力的審級において形成されるような対象であり，エロスの対象としての自己に他ならない。このような自我や身体やアイデンティティの形成に，スポーツ，そしてスポーツのコミュニケーションは大きな役割を果たしてきたし，これからもいっそう大きな影響力を発揮してゆくであろう。

その際に，「近代スポーツ」の現代的・テクノロジカルな側面，その反動としてのエコロジカルな側面，コミュニティ形成の側面が，どのように重層的に展開されるのかを人間解放の視点から批判的に検討する時期にさしかかっている。

また，フーコーは「性権力 bio-pourvoir」という概念を用いて，セクシュアリティが「身体」を通じて「個人」を管理する権力の技術となった様を明らかにした（Foucault, 1976）が，この研究は，個々人が「主体」的に諸制度を構成し，統御し，運営する近代的な「権力」の装置（Foucault, 1975）としてのスポーツ・コミュニケーションの存立の機制と生成の重層史を探索し，提示するうえで，触発に富んだ手がかりを与えている。

注

＊1　これについては見田宗介が比較社会学的研究の方法論を提示している（見田，1995，1-11）
＊2　この気分的の「気分」とは，「基礎的な実存範疇」（ハイデッガー）のことである。
＊3　傑出した例外がフーコーとブルデューである。
＊4　F．エンツ『教会の任務とスポーツ』ドイツスポーツ連盟学術叢書，ミュンヒェン，1970（こ

の論文はカール・ディーム賞第2位となった）

＊5　特に，J．H．ハーグリーブスの研究は注目に値する。1994年の『sporting Females』では「1章：スポーツの理論」でマルクシズム・ネオマルクシズム・構造機能主義・エスノグラフィー等のスポーツ研究がいかにジェンダーを無視してきたかを検討している。「2章：スポーツフェミニズム」「3章：自然と文化；ビクトリア期とエドワード期における女性にとってのスポーツ」「4章：女性の運動の限界」「5章：レクリエーション的スポーツと競争的スポーツ」「6章：戦間期；限界と可能性」「7章：女らしさと男らしさ；女性スポーツのイメージの変化」「8章：ジェンダー権力関係；制度化された差別」「9章：オリンピックにおける女性；認知のための努力」「10章：すべての女性のためのスポーツ；問題点と前進」「11章：21世紀へ向けて；多様性と可能性」等の考察はフェミニストのパースペクティヴにとってスポーツが重要なコンテクストを提供していることを認識するのに役立つ。

引用・参考文献

石川弘義・斉藤茂男・我妻　洋／共同通信「現代社会と性」委員会，1984『日本人の性』文芸春秋社

市川　浩，1975『精神としての身体』剄草書房

市川　浩，1984『＜身＞の構造』青土社

大沢真幸，1990『身体の比較社会学1』剄草書房

大沢真幸，1992『身体の比較社会学2』剄草書房

小倉千加子，1988『セックス神話解体新書』学陽書房

ベーメ，J.O．他，1972，唐木国彦訳『後期資本主義社会のスポーツ』不昧堂出版

ゴッフマン，E.，1985，佐藤毅訳『出会い』誠信書房(Goffman，1961)

スミス，A.，1973，水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房(Smith，1759)

中村雄二郎，1979『共通感覚論』岩波書店

中村雄二郎，1983『魔女ランダ考』岩波書店

橋本純一，1988「現代スポーツとセクシュアリティ」『actes5』所収，日本エディタースクール出版

フーコー，1977，田村叔訳『監獄の誕生』新潮社（Foucault，1975）

フーコー，M.，1984「主体と権力」『思想』1984-4，岩波書店（Foucault，1982）

フーコー，M.，1986，渡辺守章訳『性の歴史』第1巻，新潮社（Foucault，1976）

船津　衛，1983，稲葉三千男ほか訳『自我の社会理論』恒星堂厚生閣

ベルグソン，H.，1965，田島節夫訳『物質と記憶』（ベルグソン全集2所収）白水社（Bergson，1896）

見田宗介，1995，「自我・主体・アイデンティティ」『自我・主体・アイデンティティ』岩波書店

ミード，G．H.，1973『精神・自我・社会』青木書店（Mead，1934）

ミード，G.H.，1991，船津衛ほか訳『社会的自我』恒星堂厚生閣

メルロ＝ポンティ，竹内芳郎ほか訳『知覚の現象学』みすず書房（Maurice Merleau-Ponty，1945）

山崎正和，1984『柔らかい個人主義の誕生』中央公論社

湯浅泰雄，1977『身体――東洋的身体論の試み』創文社

Bergson, H., 1896, *Matiere et Memoire*, Paris, (Euvres de Bergson, Edition du Centenaire)

Foucault, M., 1975, *Surveiller et punir—Nassance de la prison*. Edition Gall imard

Foucault, M., 1976, *L'histoire de la sexuarlite,* Edition Gallimard.

Foucault, M.,1982, "The Subject and Power" in H. L. Dreyfus and P. Rabinow, (ed), *Michel Foucault : Beyond Structuralism and Hermeneutics,* The University of Chicago Press.

Goffman, E., 1961, *Encounters,* The Bobbs-Merrill.

Hargreaves, J. E., 1986, *Sport, power and culture,* Cambridge, Polity Press.

Hargreaves, J. H., 1994, *Sporting Female,* Routledge.

Merleau-Ponty, M., 1945, *Phenomenologie de la Perception,* Paris

Mead, G. H., 1934, *MInd, Self, and Society* (C. W. Morris, ed.), The University of Chicago Press.

Nisbet, R. A., 1966, *The Sociolgical Tradition,* Basic Books.

Reich,W., 1933, *Massenpsychologie des Faschismus,* Kopenhagen.

Rojek, C., 1985, *Capitalism and Leisure Theory,* London Tavistock

Smith, A., 1759, *The theory of Moral Sentiment,* Liberty Classics.

Turner, R. H., 1962, "Role Taking" , in Rose, A., (ed), *Human Behavior and Social Procsses,* Houghton-Mifflin, pp. 20-40.